

犬を愛するすべての人たちへ。



寝言で吠える犬。

長いため息をつく犬。

あおむけになるとクシャミをする犬。

フローリングの上を、チャチャチャと歩く犬。

おなかをなでられて、気持ちが良いので、つい自分の前足をかむ犬。

おやつほしさに、覚えている芸を次々と披露する犬。

かまってほしくて、足もとにボールをおいてみる犬。

リードを持って立ったら、もう玄関のドアの前で待っている犬。

待ち遠しかったごはんの時間を、全然ゆっくり楽しめない犬。

ほめてあげたら、なにかくれるのかと期待する犬。

ポップコーンのような匂いがする肉球を押し付けてくる犬。

家族が帰ってきただけで、全身でよろこびをぶつけてくれる犬。

犬ってヘン。

犬がいる生活って、すこしややかしい。

でもふりかえってみれば、

犬がいてよかった、楽しかったと思う毎日。

犬がいなかったら、気づけなかったこともいっぱいある。
道に咲く花や、土の匂い。

目的もなく、ただ歩くことの気持ち良さ。

近所ですれちがう人たちの笑顔。

ちよつとした生きがいみたいなもの。

そして、

このなんでもない一日が、

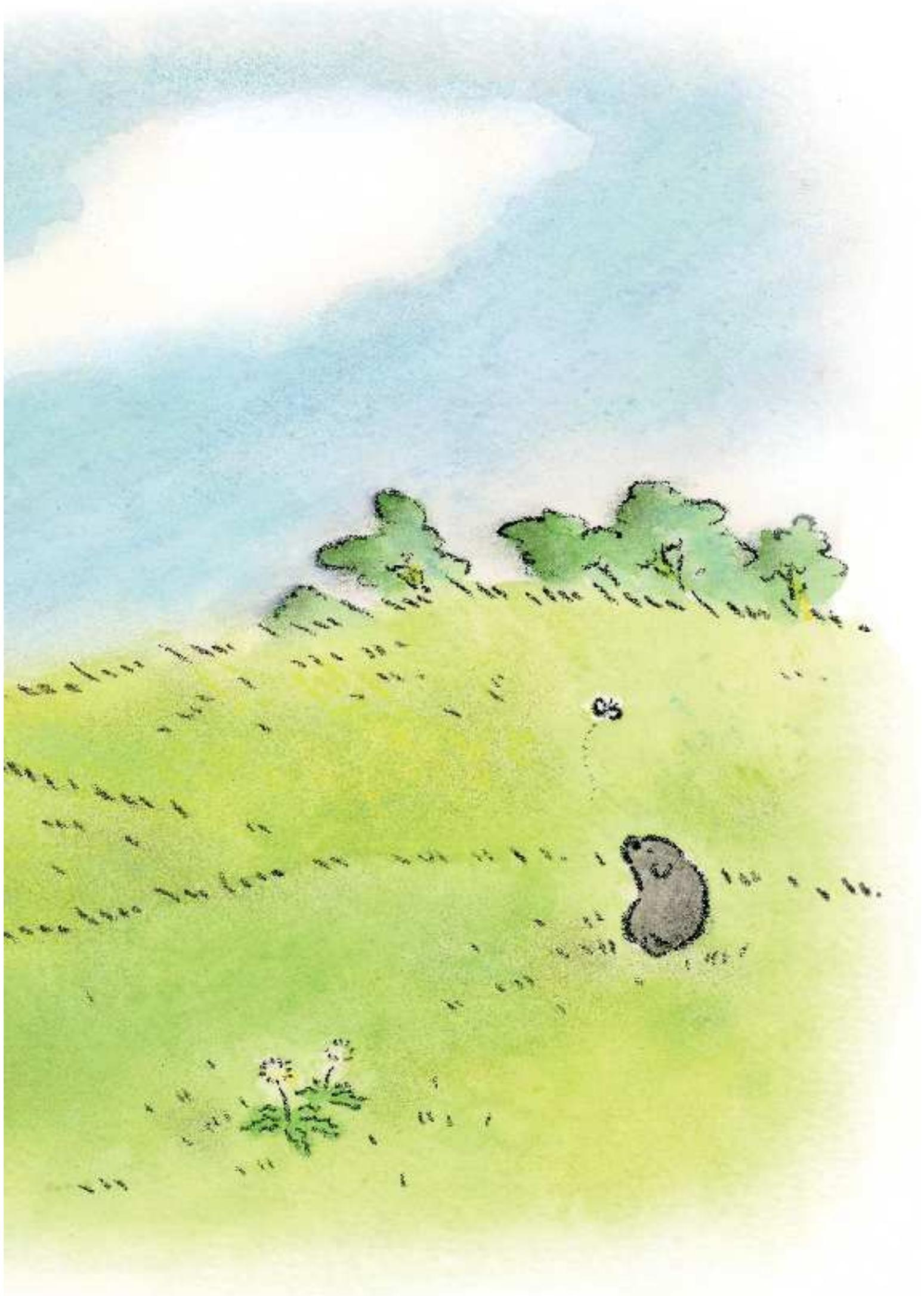
本当はかけがえのない幸せな一日だということに。

この世界はやさしさにあふれている。

それはいつまでも変わらない。

犬たちはいつも全力で、

私たちにそのことを教えてくれようとしている。





まえがき

犬と人間が出会って約2万年。

“地球上で最も親しい動物”ともいえる犬たちは、私たちとどんなにかかわり方をしているのか。

その実態を知りたいという思いから、いま犬を飼っている人、かつて犬を飼っていたことがある人、飼ったことはないが犬が好きの人など、さまざまな愛犬家たちから“犬との思い出”をたくさん集めました。

当初は、ほのぼのとした心温まる話を期待していましたが、寄せられた“犬との思い出”の中には、飼い主の人生を変えるきっかけになってくれた犬、傷ついていた心を救ってくれた犬、バラバラになっていた家族の絆をつなぎとめてくれた犬など、想像以上の貢献を果たしている話もあり、驚かされました。

そして、たとえどんな家庭で飼われていても、犬たちは一様に、私たちに家族の大切さと、生きることを楽しむ気持ちを教えてくれているのだと、あらめて知るこ

とができました。

犬と過ごす日々は、なぜこれほどまで私たちの人生に深い影響を与えるのでしょうか。

それはただ「犬がかわいいから」「犬の行動が面白いから」というだけではなく、時間がたてばたつほど「犬の愛情の大きさに気づかされるから」でしょう。

私たちが犬と触れ合っている時間は、犬との暮らしのほんのごく一部です。

私たちが愛犬のことをまったく考えていない間も、愛犬は飼い主にまっすぐな愛情を注ぎ続けています。

日々の忙しさの中で私たちが忘れかけている、ひたむきで、まっすぐな愛。

それを本書からあらためて感じていただき、皆様の幸福に変えてくださることを願ってやみません。

三浦健太



CONTENTS

STORY	STORY	STORY	STORY	STORY	
5	4	3	2	1	
犬にとっての名前	犬がくれる健康	犬は毎日「ずっと同じ」がいい	いつも、まっすぐ	大切なのは、この瞬間だけ	まえがき
——オマエ——	——アキ——	——フィロス——	——ラッキー——	——ベル——	——
51	43	33	24	13	6





STORY

10

いつの間にかやってくる

——リロ——

107

STORY

9

ちゃんと、守ってくれますか？

——グッチ——

98

STORY

8

必要とされる幸福

——トッポ——

86

STORY

7

ストレスに負けない犬

——カール——

75

STORY

6

安心できるにおい

——タロとジロ——

66





CONTENTS

STORY	STORY	STORY	STORY	STORY
15	14	13	12	11
困った行動の直し方	リーダーの条件	最愛の犬との別れ	大好きな時間	一緒にいたい!
——ビッキー——	——モモ——	——ピート——	——レオン——	——リン——
160	149	139	128	117





STORY
20

あとがき

226

犬のほめ方

224

——
——コタロ——

本当の呼び戻し

212

STORY
19

犬と生きる

——
——マーク——

203

STORY
18

捨てられない犬

——
——ハル——

194

STORY
17

犬と痛み

——
——ハナ——

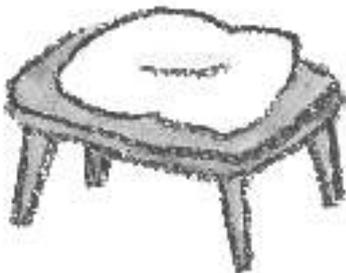
182

STORY
16

命がけの信頼

——
——レン——

171



本書で紹介するエピソードは、実話をもとにした物語です。

STORY

1

ベル

大切なのは、
この瞬間だけ



犬の寿命は20年弱。「犬の1年は人間の6年」に相当すると言われ、子犬の頃には人間の12倍の早さで成長します。

獣医学や適切な食事の研究が進んだことにより、犬の寿命は次第に伸びていきますが、それでも私たちのせいぜい5分の1程度です。

成長が早い分、老化も早く、私たちから見れば「犬の一生はあっという間でしよう。

でも私たちと違い、犬は老化を恐れませんが、正確に言うと、犬はそんなに先のことは考えようとしません。

反対に、これまで経験してきた過去の出来事についても、覚えてはいますが、わざわざ思い出したりしません。

犬は、先のことや昔のことにはまるで関心がなく、「今」のことしか考えようとしません。

犬にとっての「今」は、私たち人間の感覚では想像できないほど大事です。強引に解釈するなら「今」より大事な「将来」はありえない」といった感じでしょうか。

ですから今は我慢をして、将来に期待することはしませんし、わざわざ過去を思い出して、大事な「今」を忘れたり、悲しんだりすることもしません。

犬がつねに考えているのは、どうすれば「この瞬間に幸せになれるか？」それだけです。

では、犬がつねに追いかけている幸せとはなんでしようか？

もちろん、おいしいおやつやごはん、楽しいおもちゃをもらえるのも幸せです。

でも犬にとって最高の幸せは、大好きな飼い主さんのそばでくつろげること。飼い主さんに体を寄せて、体をやさしくなでもらいながら、笑顔で語りかけてもらえることなのです。

そんな犬たちの態度は、私たちに「『今』より大切な時間はない」ことをあらためて気づかせてくれます。



生きていくだけで自慢

——10歳のフレンチブル（♀）を飼う 35歳男性より

私は大手の電機メーカーに勤めています。

この会社に内定が決まった当時は、まさかこんな日がくるとは思いもよりませんでした。

世界市場で液晶テレビ、携帯電話、半導体などのシェアが低迷した影響で、業績の悪化は歯止めがきかず、またたく間に人員の整理が進み、すでに同期の半数近くが会社を去っていました。

私には同じ年の妻と、6歳になった一人娘がいます。

家族のためにも収入を途絶えさせるわけにはいかないので、早く次の職を探しておかなければと焦っていました。しかし私はプレッシャーを感じやすいせいか体調を崩し、またこの年齢で今と同じような条件で雇ってくれる会社が見つかるとも思えず、なかなか行動に移すことができませんでした。

その一方で、自分が置かれている状況について妻にはずっと黙っていました。話したところで家庭の雰囲気は暗くするだけだと思っていたからです。

悩みを一人で抱え続けながら、家の中でふだん通りにふるまうのは苦しいことです。いつそどこかに消えていなくなってしまうたい、と考えることもあります。家族を捨てて、どこか知らない町で一からやり直そうか、とも。そこまで思い詰めているくらいなら家族に打ち明けてみればいいじゃないか、と頭ではわかっているのですが、いつも明るく、笑いの絶えない妻と娘を前にすると、それはできないことでした。

そんな状況で苦しんでいるところへ、さらに追い打ちをかけるような出来事がありました。

うちで飼っていたフレンチブルに異変が起きたのです。

ある日、私の書齋にベルがこのこ入ってきました。書齋はベルが生まれたときから立ち入り禁止にしていたので、はじめはただの偶然かと思いいリビングに戻しましたが、しばらくするとまた書齋に入ってきます。それを一日に何度かくり返しました。

どうも様子がおかしいと夫婦で疑いはじめて間もなく、ベルは壁に向かって吠えたり、

フンを粗相したり、同じところをぐるぐる回ったり、といった不可解な行動を取りはじめます。

決定的だったのが、娘がベルの頭をなでたときです。家族でいちばん仲の良かった娘に対して、ベルは突然、歯をむき出したのです。

後日、犬も認知症にかかるということを知りました。

娘と一緒に成長してきたベルは、まだまだ若いと思っていました。いつの間にか10歳の老犬になっていたのです。

ベルに威嚇されて以来、娘はショックを受けたのか私が仕事にもかかわらず「ベルにかまれた」「ベルが外に出ちゃった」「ベルがベッドにおしっこした」などと、ひんぱんにメールを送ってくるようになりました。

ベルは必死に生きようとしていました。

そばに寄り添えば横たわったまま尻尾を振ってくれましたし、手でドッグフードをあげれば首をもたげてもそもそと食べてくれました。しかし認知症の進行に合わせるようにしてベルは日に日に弱っていきました。体毛はバサバサになり、すべての行動が緩慢

になっただけいきました。そして一日の大半を、濁った半開きの目で宙を見つめたまま、寝転んで過ごすようになっていきます。

そんなベルの姿を見て私たち夫婦は覚悟を決め、「今のうちにできるだけベルの好きなようにさせてあげよう」という話をしていました。

そして毎日「ベルが、ベルじゃなくなっちゃう」と言っては泣く娘に、どういう心のケアをするべきかを話し合っていました。

そして今日、一日、珍しく娘からのメールが一件もなかったのです。

だから終業時間ちょうどに娘からの着信があったときは、なんとなく予感するものがあり、勇気を振りしぼってメールを開きました。

すると、

「ベルがうんちした♪」

という件名が。

3枚の画像が添付されていました。

1枚目は、トイレシートの上で、相撲の立ち合いのような格好をしたベル。

2枚目は、にこにこ笑う娘と両手でハイタッチするベル。

3枚目は、誇らしげに胸をそらした、カメラ目線のベル。

思わず「なんなんだこれは？」と声が出ました。

うんちをしただけで、なんでこの犬はこんなに偉そうなんだ。

言っているそばから、笑いがこみあげてきます。

それっぽっちのことで、なんでそんなにがんばれるんだよ。

ベルの画像を見ているうちに、だんだんわけがわからなくなってきた、今まで一人で悩んでいたことがどうでもよくなってきた、急に心が軽くなってきました。

隣にいる先輩から「なんかいいことでもあったの？」と聞かれて、私はとっさに「ベルがうんちしたんですよ」と真顔で答えてしまい、先輩は「なんだそりゃ？」と身体を

のけぞらせました。

笑いが生まれました。

オフィスの中がぱっと明るくなりました。

メッセージには続きがあって、

「パパも負けるな！」

とグーパンチの絵文字。

私は家族によつぽどひどい顔を見せていたのでしよう。
携帯の画面が涙でにじみました。



生きれば生きるほど、
もっとこの人たちと生きたいと思う。

